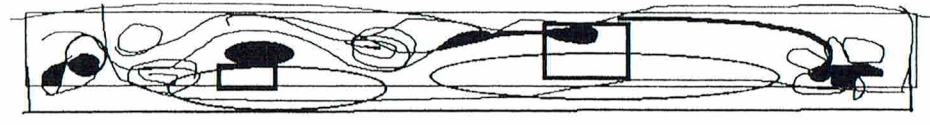


# 香蘭

2019年(令和元年)8月号

西澤みつぎ追悼特集

第96巻 第8号 通巻1064号



## 香 蘭

2019年(令和元年)8月号  
西澤みつぎ追悼特集  
第96巻 第8号 通巻1064号

### 目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(48)	宮口弘美
作品一 特選(八月号)	西野・大井田・松田・朝香・坪・宮原・鈴木(桂)・伊藤(康)・宮口
作品二・三 特選(六月号)	江口・白井・松沢・青山(穂)・小山・武藤・小林(純)・三神・山本(武)・柳沼
作品	1 2 3 4 6

### 推薦香蘭集

歌の生まれる場所(79)	大島昌子
村野次郎への旅(113)	千々和久
転載「きつとりターン・マッチを」	千々和久
西澤みつぎ追悼特集	幸

エッセイ 自由研究 開拓の心	手塚春世
焦点(六月号)	高島憲子
七首抄(六月号)	音の歌・聴覚の歌
近詠十五首「公園の春」(六月号)	渡辺(君)・近藤・福原・阿部(谷)
作品一 特選欄(六月号) 評	丸山三枝子
作品二 評(六月号)	伊藤唯見
作品三	小藤阿羅
作品四	沙林
香蘭集	黒羽

緑地帯	金子(幸)・大島(保)・市川
明宝研究会第一〇七回五月例会	飯田高
他誌拜見 105	岩田明恵子
文法あれこれ(3)	田端
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動き	桜井京子
歌集管見 北神照美歌集『ひかる水』評	明美
受贈歌集・歌書御礼	明美
歌会及び会合・会員消息・他	明美
編集後記・新宿日記	明美
表紙絵	和雄

表紙絵	中村 陽子「鏡を置けば」	118
目次	緑地帯カット	114
和雄		113
		110
		108
		107
		104
		102
		100
		98
		96
		94
		92
		91
		90
		88
		86
		31
		22
		20
		19
		82
		81
		73
		23
		6
		4
		2

## とどろきて夜汽車過ぎたりふけし灯の下に

### ひそけき鉢水のゆれ

これは昭和七年の作品。「夜汽車」、この昭和の香りのする懐しい響きに胸がしめつけられる人も多いのではないだろうか。

私は十代の頃を思い出す。故郷で大学受験のための受験勉強をしていた頃、夜更けに夜汽車が汽笛を鳴らして走ってゆく音が遠く聞こえてきて、何かものがなく、ペンを止めてしばし物思いにふけたものだった。受験への不安や、友人や異性との関係、親との齟齬、特に母親との関係はひどかった。思春期になり、言うことを聞かなくなつた私に向かつて、母は何度も「おまえなんか産むんじゃない」と暴言を吐き、「産んでくれと頼んだわけじゃない」と言い返し、ながら、私はその度にひどく傷ついていた。

この歌を読むと、あの頃のひりひりした痛みを思い出す。村野先生は、何を思いながら夜汽車の響きを聞いておられたのだろう。

〔短歌新聞社文庫『楞風集』64頁、村野次郎三百首〕  
30頁に収録〕

『楞風集』

## 四選者の作品

さあ乾杯を

平塚 千々和 久幸

図書館を出でカフェ、居酒屋と寄り道し何を忘れて帰る意味のなきことの愉しも鬚髭を泡で濡らしてさあ乾杯を食うために生きるにあらざるため食いたる後のわがタイエツトわたくしが五月の風であつたとてだあれも来ない朝の食卓傘まわし橋をしゃなしゃな来られるは佳奈にあらざる雨は止みしにもう八十六歳ですよと幾たびも言われてついに言いそびれ来つ暇つぶしに毒にも薬にもならぬ短歌があつても悪くはないか待つ者のなき身の軽さ夜の階を帰らんとして不意に躓く

ひねくれ一茶

我孫子 丸山 三枝子

数分間上りきたれば大東京のパノラマ開くビル、ビル、ビル、ビルスカイツリー東京タワーを一望に見せてたなびくすじ雲近し荒川の美しき架橋をゆるゆると車ゆくなり遊びのごとくいましがた過ぎたる雨にひかりいる街をゆくなり 光の街路一人消え二人消えゆく街角をもうすぐ曲がりわたしも消える改札を入りエスカレーターに乗る 少し猫背のわたしと思う

〔月花や四十九年のむだ歩き〕詠みし一茶よ年八百句  
文化十年正月に帰住したりき五十一歳ひねくれ一茶

ナンジャモンジャ

東京 桜井京子

赤ければ赤いほどよしバス停のアカメガシワの渾身の赤この桜わたしの桜と来てあふぐ風さむき日の御衣黄桜

平成も令和も関係ありませぬおや浜茄子の花が咲いたよめでたくも十連休のただなかをナンジャモンジャが花ひらきたり平成が令和に変はつて降るためにアメリカカ花水木しと濡れたる十連休なにをするかと問はれたら短歌のほかはすることあらず連休は水族館に行きしとぞ花夏の見たるジンベイザメよふらふらと死んでもみたい朝のため増えてゆくべしホームのドアはいつまでもあり

横浜 渡辺 礼比子

そそくさと母のホームをあとにせり伸びかけの爪を目に留めにつつアイロンを消したかどうか ハルジオン群れ咲く角にきびすを返す解体屋が挨拶に来て告げゆけりおばあさん病みて家を売りしと淫色をまとえる老婆ひっそりと躊躇いきき(隠居)覗けば嘘つくも気骨の折れることなればいつそあけすけにいつてしまおうか ティッシュ箱に裕子は歌を書きしとうなるほど臥位にはよきツールなれ谷戸奥の家より洩るる叱声にときおり混じる「アイゴーアイゴー」独り居の老爺の庭に夏蜜柑たわわに生りていつまでもあり

# 作品一特選



(八月号作品、五選者共選)

空恐ろしき

東京 西野 美智代

拾ひ来し楠の紅葉あかがねに洩く光りて机上に反りぬ  
遅れると予告のありし五月号 十連休の初日に届く  
令の字に許せざる語の浮かびくる空恐ろしき召集令状

国内総生産世界二位とぞ誇りしが下降をたどり平成終はる

乱に変、役、陣、戦と言ひやうは違へど数多血の流れ来し

絶対に無理はしないと言ふ人のその無理だれかの肩にかかれり

これの世の市と言ふべきデパートの上に二重の虹が立ちをり

令和はじまる

川崎 大井田 啓子

枝先にアブラムシが群がりて令和なんて知らないと言ふ  
参議院議員某氏が道ばたに立て看となり令和はじまる

うらうらと令和寿ぐ十連休スマホを買ふと出かけて来たり

俺を困らす

東京 坪 裕

沢山の人の見られて満足そうしだけ桜は輝き垂るる

今はなき先生訪ね岩波の短歌辞典を貰い来たりぬ

伏せてあるバケツのそばまで転がりて袖子は朽ちおり主なき庭

楚楚として庭を歩める先生の姿たちきて俺を困らす

精一杯力を込めて詠まれたる机は今もそのままにある

西澤先生の教えをどれだけ受けつぎて行けるだろうか春真つ盛り

もう二度と来ることなき庭に立ち目礼しつつ別れを告げる

つくづく平和

倉敷 宮原 迪恵

愛着のスカートに温き風の吹き冬は黙って行ってしまった

昼ひなか猫語とびかうわが庭を人らのぞいてつくづく平和

糸柳の並木を驟雨が通りすぎわが街すこし若返りたり

亡き夫の使い古しの膝かけを未練がましくまた仕舞いたり

春キャベツぎくぎく刻み盛る皿は亡父の作りし備前の大皿

三分間の無言の行が終わりたりカップヌードルさあ召し上がれ

キャベツ畑の蝶はいずこで落ち合うか意志あるごとく飛んで行きたり

五月

西宮 鈴木 桂子

あの暗き朝の川面にばらばらと小石投げたるやうに水鳥

急がるる仕事のありて机に寄せば窓近く来て夏鳥が啼く

あかあかと木に花咲きてわきあがる力のごとく五月の空に

カウンターで真剣に聞く「それはそうとそのスワイプつて何ですか」  
手に載せてスワイプ永久にくり返しスマホ馴染ますわれの脳に  
カーテンをかすかに揺らす春のかぜ連休最後の午後の日ゆるし  
銀行のかどを曲がりて夜のバスわき目もふらずわたしを運ぶ

募集 中

川崎 松田 恭子

疲れ果てし昨夜の厨は戦場で今確かめる戦ひのあと

たまる書類手ぎはよく捌き積んである衣類を統べる秘書募集中

白寿なる母訪ひたしと言はれたりめつたに鳴らぬ固定電話に

食べることに如何なる意味があるのだから明日に備ふる一合の米

患者氏名面会者氏名毎日を書かされ母に会ひに行くなり

入院の母の傍らやることなしただなでやる細き手足を

犬を真似伸び伸びをして猫のごとく身体を丸め体操終了

白枇 杷

東京 朝香 ふさ枝

石楠花の彩る天城の美しさ今宵は誰ぞに手紙を書こう

竹籠に盛られて届く白枇杷のもぎたてを食む梅雨近づきて

鶯の声に目覚めて届く梟の声に睡りぬ伊豆の暮しは

赤あかとブーゲンビリア咲く下にボメラニアンの骨埋めてあり

朝夕に取る夏草の果てしなし湯ぶねに強張る指をのぼしぬ

寺山の榎の大樹を昇りつめ天より垂る紫藤の花は

海岸より電柱ごとに標示されわが家は海拔一〇・五メートル

〈私の何がそんなに不満なの〉思ひもよらぬ娘の問ひなりき

暮るるまで空ながめある我ならめ五月の空がなぜか愛しく

マンシオンに遠く一つの灯がともり街はしづかに目覚めゆくなり

精神は飢えてゐるかやと青年のやうに時には問ふてみる朝

時刻表

東京 伊藤 康子

新ダイヤの時刻表たつぷり置かるるにスマホ持つ人みな素通りす

吊り革に両手をかけて伸びをする昭和育ちの仲間のひとり

大方の予想の外れて清々し「新元号は令和であります」

本日は平成最後の勤務なり令和になると業務変わらず

十連休に三日の休みの有り難く賜いし歌集の風に吹かるる

差し替えのエシックスカードの配らるる社長が四月に替わつたらしい

事務用の印鑑認証の登録をしてもいいけどたかがパートで

老い支度

東京 宮口 弘美

「令和」という時代を共に迎えたり老いたる父と惚けし母と

桜散りつつ咲き初む平成が令和になろうと関わりをなし

連休に関わりもなく黙々と仕事しておりよきかな日本

空気など私は読まぬ 部下叱る上司に熱いお茶を持ちゆく

老い支度そろそろせんか捨てる物より買ひ物の未だ多しよ

おそらくはパクチーなんぞ食べたことないだろう父九十歳になる

ヘルニアの手術したのとささり言う友は辛いも痛いも言わず

# 作品二、三特選



(六月号作品から) 千々和 久 幸 選

## 〈作品二〉

猫と夫と母と

柏 江 口 絹 代

唯一の仕事となりし猫の世話夫の老後の思いもよらず  
 体力も気力も失せて部屋籠る夫に寄り添う少年期の猫  
 日光浴しているのだと母は言いせんべいのごとき手の平かざす  
 後ろから「風呂は嫌だ」と母の声 絹さやの花二つ咲く庭  
 手作りの味噌の自慢をひとしきり話して友の心ゆるびぬ  
 桜花はるか遠野のさくらばな 近ごろ鬼の話聞かず  
 ・夫の退職でまた仕事一つ増え、絹さやの花が同情している。遠野の説  
 話と関連な母は、作者の詩歌の母胎。

冠 雪

長 野 白 井 紀代子

一筋の星が流れたかのように水が流れたフロントガラスに  
 たんぽぽのほほえみほどの幸せか厨にひとり月を待つ身は  
 ため息に溜息をもて応えおり夫と二人の冬の日の暮れ  
 おおかたは気の向くままに生き来しか北アルプスは冠雪まぶし

半切りの使い残しの大根が新芽出しおり身は皺みつつ  
 人生が私に教えてくれること夕焼け色した手帳に記する  
 ・独自の感覚で切り取った世界が生きている。二首目の比喩、三首目のウ  
 イットは出色。五、六首目の切り取りも良い。

墓 参り

さいたま 松 沢 みどり

先生はピンクのニットが似合ってた薄桃色の花束選ぶ  
 墓参り花と饅頭持っていき肝心の線香を忘れて慌つ  
 先生はきつとそんなの気にしないと云うのだからもう聞けないが  
 饅頭を供えた後に先生と分け合って食べる二人で食べる  
 また会いに来ますと心で呟いて誰もいない墓地を後にする  
 整然と墓石が並ぶこの列の最後にいつか私も並ぶ  
 ・間近に對話をしているような、軽妙な実在感が良い。短い期間だったが、  
 故西澤選者を全身で受け止めた。

春 間 近

米 子 青 山 侑 市

晩節は五十坪余の菜園に野菜作りのノウハウ尽くす  
 啓蟄を過ぐるも風は冷たくて畑掘り起こし虫驚かす  
 高菜を切り大根を抜きキャベツ採る三月初め春を先取る  
 沈丁花に身を寄せたればなんとなく風も和らぐ心地こそすれ  
 老骨を鍛へんとして起きしなに五体を揺するほほ一時間  
 背中まで熱き血潮の甦る皆生温泉足湯の効き目  
 ・何事にも全力投球の作者、健康管理にも創意工夫があり、独自の鍛え方  
 で体質改善に成功した。

情 報

倉 敷 小 山 ヨ シ 子

待ちかねし神戸からとう宅配にサインしながら口元ゆるむ  
 おしゃべりな少女のような山茶花の奥にひっそり白藪椿  
 庭隅におまけで貰った麦の苗伸びて穂が出て太り始める  
 お日柄もよろしいようで白バイが待機している交差点わき  
 お隣は一日留守にしてみました回覧板がもらす情報  
 野良猫がなにか用かと思っておりぬ昼の漁港はひっそりとして  
 ・二首目の比喩の愉しき、四首目のアイロニーは共に出色。

北を指す

東 京 武 藤 昭 彦

列車待つ函館ちかくの食堂に赤味がかった烏賊食らいおり  
 視界から地面の消えて夏雲の近づく小樽の坂をドライブ  
 啄木の愛しし幅ひろき青柳町とうきび焼くる屋台にならぶ  
 おかわりをするたび肉の厚くなるジンギスカンの洗札を受く  
 昔むかし「幸福」という駅のあり入場券の十円のころ  
 知床のセセキの浜の湯につかり国後指して「もどつて来いよ」  
 ・作者の眼と休臭が生きている旅行詠の親しみ。五、六首目は時事への  
 切り込みがあつて忘れたくない。

## 〈作品三〉

雪 女 郎

横 浜 小 林 純 子

オルゲルの舞踊人形回り終へわが老年閉ぢよゆつくり  
 雪女郎ほどの情けを君にかけ君を放ちし二月の酒場  
 二分後に記憶薄れる人の手を両手に包み別れ告げゆく  
 噓して冬のマフラー巻き直す飛び立てずをり身重の鳩が  
 ああ踏み絵踏むも踏まぬもどちらをも選ばず浜に貝拾ふだらう

・非情に徹しようとして徹し切れない、身振りの大きさが見所。三首目は  
 作者の仕事を通しての所感。

野 薊

愛 知 三 神 進

花ことは妻には告げず野薊の「私をもつと知つて下さい」  
 自治会の夜まわり行事終えし妻夜気の冷たさ纏い帰り来  
 終バスの去りし駅前吾ひとり竹つを訝り犬曳く人がゆく  
 真向かいのホームに並ぶ女子高生気紛れの風に膝を曝して  
 ジムに向かう車中に妻が不意に問う延命治療するしかないか  
 ・手堅く詠んで、言葉への修煉度を感じさせる。

さくら餅

福 岡 山 本 武 子

さまざまな音の絶えたる午前二時木の芽おこしの雨が降りおり  
 地下鉄を降りて寄り道さくら餅求め帰れば独りは淋し  
 山菜莢や連翹ミモザが黄の花を咲かせて春を呼んでいるなり  
 夕食は少しふんばりヒレ肉のステーキにしようもうすぐ春だ  
 諦めと少しばかりの希望とがいきつ戻りつ今の私は  
 ・分厚い人生経験の背後に覗く希望と孤独感が切ない。

愛

足 利 柳 沼 きよ子

虐待死した子等の名は莉結愛ちゃん心愛ちゃん結愛ちゃん愛の字ばかり  
 非行児も被虐待児も一緒とはあざれた実態児童相談所  
 呆れたね悪夢の政権などと云うそのまま安倍に返してやりたい  
 トランプがばらしてしまつた舞台裏安倍晋三の美しい手紙  
 春浅く霜の降りたる散歩道鹿の鳴き声啄木鳥の音P；  
 ・三、四首目、よくぞ言ってくれたという快感、短歌だから言える。

村野次郎への旅 (113)

「地上巡禮」と次郎 (六)

千々和 久幸

前回に続き「地上巡禮」第一巻第四號(大3・12)に掲載された村野次郎先生の十首から、印象に残った作品を読んでおこう。  
③浪ひとつたてず入江のころめけばわがころ深くおそれり秋

この一連は今日の(わたしの)視点では理解し難い歌が多くあつて、心を弾ませ読み継ぐという訳にはいかなかった。

③の作品も入江の光景を漠然とは把握出来ても、結句の感情がいま一つ実感出来ない。なぜ、どう「秋」を「おそれ」たのだろう。その「おそれ」は、恐れ、畏れ、怖れ、懼れのどれか。最初からこういう疑問符が付くようでは、この歌を読む資格はなからう。

三句の「ころめけば」は「蕩めく」を展開したもので、原義は「①とろとろする。眠気をもよおす。②恍惚とする。うっとりする」(広辞苑)である。

この言葉を含む上句からわたしが咄嗟にイメージしたのは、神奈川県三浦半島にある油壺である。油壺はいかにも眠気をもよおすような、とろりと静かな入江である。  
油壺の由来はネットには、こうある。

1516年、新井城に籠もった三浦一族は北条早雲の大軍を相手に3年間にわたって奮戦するも、三浦義同(道寸)を始め将兵は討死に、残る者は油壺湾へ投身し、湾一面が血汐で染まりまるで油を流したようになったので、後世「油壺」と言われるようになったとされる。また、湾内の水面が油を流したように静かだからという説もある。

こんな知識がこの一首の理解に必要だとも思われぬが、やはり結句は難解である。とろけるような入江に来る秋を、その秋の何を青

たのだった。

むろん白秋のこの一首は、芭蕉の「道のべの木槿は馬に食はれけり」を下敷きにしたものである。ついでにこの歌の初出(大正6年、「曼陀羅」創刊号)の三句は、「さみどりの」となっており、わたしの最初の記憶はこちらである。発表時期だけを見ると村野作品の方が早いから、先生が白秋作品に習ったということは当たるまい。話が逸れた。

赤き外の面に  
うっかり読むと「垣蟲」「今風」と読み方で踏く。ここは「からたちの垣」「蟲」は、そして「今」「風もなき」と区切って読まねばならぬ。その「蟲」にしても、これは「虫」の旧字体である。当初は虫の種類によって読み分けられていた筈だが、昨今は語源はお構いなしである。

余談はともかくこの一首、「からたち」の垣にいる虫を鴉が餌食にしたのだろう。それを受け身にして「さされけり」としたところに、何となく白秋の息遣いを感じる。

白秋の息遣いというわたしの根拠は、『雀の卵』(大正10年8月)の「寒」一連十首中の、次の歌に由来する。  
・春浅み瀬戸の水田のみどり葉の根芹は馬に食べられにけり

わたしはこの歌をまだ短歌に出会う前、新聞で見た(季節の風物詩として写真付きで掲載されていた)のだが、下句の表現の珍しさもあつていたく気に入る、ずっと印象に残っていた。

ここでも「赤き外面」は、これまた白秋の「桐の花」(大正2年1月)の巻頭歌「春の鳥な鳴きそ鳴きそ」の下句を連想させるが、こちらは時期的には白秋が先である。それはさておきわたしの感想を言えば、やはり下句が上句に負けていると言わざるを得ない。思い切つて転換するならともかく、この完結した上句には何を付けても説明の域を出まい。  
⑦いつしらずかたはらに兄泳ぎ居り兄の温みを感じるあはれ

年次郎はこころ深くおそれたのだろう。個人的な事情、事柄はむろん論の外である。  
理屈をつければどうにでも言える。例えば全身を秋に魅入られ金縛りになる秋の重圧感とも、ごく普通に秋の寂寥感と受け取つてもいいだろう。しかし、頭では理解出来ても、胸に落ちない。疑問符を付したまま先へ進むことにする。

④棕櫚の葉の陽に洋刀をふるごときいまひとときの赤き夕ぐれ

③と比べれば内容も構図もずっと解りやすい歌である。「洋刀」はサーベルのことで、棕櫚の葉に差す夕暮れの光と、サーベルを抜いた時に刀身の発する光の交差を詠んだものだということは解る。眼目は二、三句の比喩にある。いかにもきらきらと白い光を反射するサーベルと、「赤き夕ぐれ」との色調の対比をどう読むかである。「夕ぐれ」の「赤き」は駄目押しに近く、気持の上では赤いが上にも赤い、という感受だろう。

ただ「棕櫚の葉の陽に」が捻れた表現であり、一首の比喩の苦心は理解出来ても、構成に窮屈さを感じる。

⑥からたち垣蟲は鴉にさされけり今風もなき  
特に注を要するような歌ではなからう。光景も内容もよく解つて、親しみを感じる。本稿(五)で神山裕一顧問の次のような指摘を紹介しておいた。  
「次郎は多摩川近くで育ったから少年の頃から水泳は習ったのであろう、がそれ。この歌は兄と一緒に川遊びに来た折のものと思われる。さすがに兄は後の儀右衛門さんであろう。ここでの問題は結句の「あはれ」という注釈にある。この一語が無くとも、読者には十分「あはれ」の感情が伝わろう。」

それは「ああ、兄さんはずっとわたしの傍にいてくれたのか」という、ちよつとした驚きに包まれた嬉しさと安堵感である。  
いつたいわたしたちより上の世代、粗っぽく言つてしまえば近代短歌は主観語(感情表現)を恐れない、という印象がある。「かなし」「あはれ」「なつかし」「苦し」「うれし」などは、殆ど手放しに使われている。

わたしたちはそこを「抑制」することを教えられてきたので、ここまで歌い上げることが出来ない。逆に言えば昨今の短歌はこの大らかさを失つて、妙にちまました技巧の上になり立っているような気がしてならない。